

隣人愛と「資本主義の精神」

—— ジョン・ロックフェラーの信仰を中心に

黄 建 富

0. はじめに

資本主義の発展における宗教の重要性を指摘した古典的な研究は、マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』である。ヴェーバーはそこで、資本主義の発展を駆動した宗教倫理としてカルヴァンの予定説に着目した。予定説では、救われる人間と救われない人間が昔から神によって定められている一方で、人間には誰が救われるかを知る術がないとされている（Weber 1920=1989: 144-160）。それゆえ信者たちは、自分が救われるかどうかという不安を抱くことになる。カルヴィニズムにおいては、この不安をなくし、自分が救われるという確証を得るためには、禁欲が必要とされた（Weber 1920=1989: 173）。そうした禁欲の最適な手段は、勤勉な職業労働である。また、職業労働によって得られた富は正当なものであり、神の祝福であるとみなされた（Weber 1920=1989: 236, 344）¹⁾。そして、消費の圧殺（信者の禁欲によって得られた富の消費が抑制されること）によって、富の蓄積や再投資が促進されることで資本形成がなされる（Weber 1920=1989: 345）。こうしたヴェーバーの解釈は、一般にヴェーバー・テーゼと呼ばれている。

ヴェーバー・テーゼは、様々な歴史的事実によって批判されてきた。しかし、それらの先行研究の大半は、ヴェーバー・テーゼを修正するものというより、否定するものである（Tawney 1926=1956; Robertson 1933; Fanfani 1934=1968; Samuelsson 1957=1971; Charles 1961; 山本 2017）。あるいは、修正を試みたものだとしても、ヴェーバー・テーゼの中心的論点から外れたものしかないように見受けられる（越智 1966; 岸田 1977; 椎名 1996; 羽入 2008）。また、テーゼに反する歴史的事実の指摘は、ヴェーバーの理念型という方法論からすれば本質的な批判ではないと、ヴェーバー・テーゼの擁護者たちから退けられてきた（山本 2017: 306）。その一方で、歴史的事実に基づく批判に対して、真摯に答えようとするのが重要であるという指摘も存在する（世良 1973: 6）。ヴェーバー・テーゼがドグマとイデオロギーに陥らないようにするため、歴史的事実との齟齬を論理的に解釈することも重要だというのである。そうした解釈によって、ヴェーバー・テーゼが逐次修正されれば、その完成度はさらに高まるだろう。

本稿で扱う歴史的事実は、ウォリントン・ネヘマイア（1598-1658）とジョウセフ・ライダー（1695-1768）の信仰日記と、20世紀の大富豪であるジョン・ロックフェラー（1839-1937）の伝記である。これらの事例を検討する意味は、勤勉や禁欲以外の宗教倫理が資本主義の発展を考察

する上で重要だということを示す点にある。その中でも特に本稿が重視するのは、ジョン・ロックフェラーである。というのも、彼はネヘマイアやライダーと共通点を持つだけでなく、本稿が重視する強迫的な利潤追求という精神性をより強く体現している人物だからである。また、ロックフェラーにおける資本主義の精神は、ヴェーバーが重視しなかったメソジスト派のジョン・ウェスレーの教義に多大な影響を受けているため、本稿ではウェスレーの三原則と呼ばれる教義についても重点的な検討を行った。これらの考察によって、ヴェーバー・テーゼを再考するのが本稿の目的である。

1. ヴェーバー・テーゼと信仰日記

1-1. 信仰日記の重要性

ヴェーバー・テーゼには回収できない歴史的事実について考察する上で、重要な資料となるのは信者が残した信仰日記である。現時点で参照できる信者の信仰日記の研究は、ポール・シーバーの『ウォリントンの世界——17世紀のロンドンにおけるピューリタン職人』（1985年）とマシュー・カデインとマーガレット・ジェイコブの「遺漏、18世紀における新発見：ヴェーバーのプロテスタントにおける資本主義者」（2003年）の二つである²⁾。以上の二つの研究を取り上げた山本通は、予定説によって引き起こされた不安が信者の心理的起動力となるという、ヴェーバー・テーゼが指摘した因果関係は存在しなかったと結論づけている（山本 2017：109）。また、もう一つの山本の重要な指摘は、その二人の信者は職業労働を通して得られた富を正当なものだと見なさなかったという点である（山本 2017：108）。山本は以上の指摘を踏まえ、ヴェーバー・テーゼを退け、資本主義の精神の起源を啓蒙主義などの合理的精神の系譜の方に求めた（山本 2004c：17-28；2017）。

しかし、啓蒙主義などの合理的な思想の系譜だけでは、ヴェーバーが着目したような、合理的で職業的な経営に基づく無制限な利潤追求という原動力の背景を十分に説明できない。だが、ヴェーバーが重視する勤勉と禁欲も、無制限な利潤追求を駆動する力を説明する要素としては不十分だと思われる。そこで本稿では、信仰日記の解釈を通じて、勤勉と禁欲とは別の宗教的な要素から資本主義の原動力となるものを探ることにしたい。

1-2. 信仰日記に見られる内面の葛藤

信仰日記によれば、信者は合理的かつ外的な行為より、内面における葛藤を重視している。だが、ヴェーバーが重視するカルヴァン派においては、こうした内面の感情は「欺瞞的なもの」と見なされたため、ヴェーバーは内面における葛藤をそれほど重視していない。このことは、ヴェーバーのルター派解釈に典型的に現れている。ルター派は外面的な行為を重視するカルヴァン派を、「行為主義」として批判した（Weber 1920=1989: 225-6, 251-2）。これは、内面的感情を重視する立場である。ヴェーバーはこうした立場に対して、現在における神との関わりによって

満足という感情が得られるため、救いを求めて働き続けることへの心理的起動力が弱まるものという解釈を与えている（Weber 1920=1989: 251-2）。ヴェーバーは、内面における感情を重視する教派を、カルヴィニズムの教義を和らげたものに過ぎないと見なしたのである（Weber 1920=1989: 219-220）。

しかしながら、信仰日記に見られる内面の葛藤の重視は、内面的な感情を重視するルター派の教義を想起させる。確かに、ルター的な神秘主義的感情、すなわち宗教の達人が感じる感情が罪責意識を弱める恐れがあるということは、ヴェーバーも指摘している（Weber 1920=1989: 225-226）。だが、こうしたヴェーバーの指摘は十分なものではない。さらに、ルター派以外にも内面的感情を重視する教派が存在することを無視することができない。例えば、メソジスト派のジョン・ウェスレーの教義では、感情が行為を支えているという主張がなされている。また、ウェスレーは、内面の感情が罪責意識を和らげて行為への起動力を弱くさせるのではなく、むしろ感情によって罪責意識が想起させられ、善行が奨励されると考えている。この一連のプロセスを明らかにするために、以下では信仰日記の内容を子細に検討してみたい。

1-3. ウォリントン・ネヘマイアにおける無限の禁欲行為

最初に扱うのは、ポール・シーバの『ウォリントンの世界——17世紀のロンドンにおけるピューリタン職人』（1985年）のプロテスタント信者であるウォリントン・ネヘマイア（1598-1658）の事例である。ネヘマイアにとって、欲望との戦いは苦痛であった。しかし、禁欲による苦痛は、神に選ばれた神の子である自分の務めであり、喜びとなるとネヘマイアは考えた（Sheaver 1985: 4, 124）。彼にとっては、救いの確証とは世俗内の禁欲によって実践された生活のことであった。この点については、山本も認めているように、ヴェーバーの主張は正しい（山本 2017: 109）。しかしながら、ヴェーバーは救いの確証を求める信者が外面的な禁欲的生活を実践するという関連を重視しただけで、信者の内面にある禁欲に伴う苦痛という側面を十分に重視していなかった。

ネヘマイアの場合、その苦痛は性欲との闘いに由来している。その闘いの苛烈さは彼が自殺を図ったことから窺える（Sheaver 1985: 21）。また、その欲望との闘いは、一生に渡って続くネヘマイアは考えていたようだ。

このことは神のものである全ての人々の境遇である……それは部分的にはサタンの誘惑によるものであり、大半の人々の中に留まり続けている原罪から部分的にくるものである。この境遇は、死ぬまで治らない遺伝病のようなものである（Seaver 1985: 20）。

したがって、この原罪から生まれた欲望とは一生付き合わなければならず、欲望の発生と禁欲行為は循環的に信者が死ぬまで続くと考えられる。シーバは、この欲望との戦いを「終わらない闘争」と名付けた（Seaver 1985: 31）。この内面における無限の循環は、ヴェーバーが言及しな

かった点である。ヴェーバー・テーゼにおける行為への無限の起動力は、救いの確証を求める欲求に由来するものである。こうした信者の信仰は、禁欲の手段である職業労働による正当な賃金が神の祝福であると捉えることで、救いの確証が得られてしまうことによって弱まり、いずれなくなるだろうとヴェーバーは予想した（Weber 1920=1989: 351-365）。

しかしながら、ネヘマイアにとって、その行為の原動力は救いの確証を求める欲求から来るものではない。ネヘマイアは勤勉な職業労働によって救いの確証が得られると考えてはいなかったのである。その根拠の一つとして、ネヘマイアが定めた禁欲を実践する71条の項目の中で、職業に関わる項目はただの4項目（48～51項目）に過ぎないということが挙げられる（山本2017: 104）。その4項目は全体の指針の中で最も重要なものではないと山本は結論づけている。また、事業の成功は、不正によってなされたことが多いとネヘマイアは考えていた（山本2017: 104）。つまり、ネヘマイアにとって、経済的な成功は、神に選ばれた確証を意味しなかったのである。

1-4. ジョウゼフ・ライダーにおける富の放出の動機

次に、リーズで活動した織元ジョウゼフ・ライダー（1695-1768）の日記を見てみよう。ライダーもネヘマイアと同じように、自らの欲望と戦っていた。ライダーは世俗の楽しみに対して常に警戒心を持っていた。例えば、彼は生涯に一度だけ妻と旅行に行ったが、その旅行の楽しい思い出について彼の日記には何も書かれていない（山本2017: 107）。また、地元の祝祭日で行われる楽しい行事は、彼にとって試練であった。試練だと考えていることから、ライダーが世俗の楽しさに対して興味がないわけではなかったと考えられるだろう。この世俗の楽しみに対する両義的感情はネヘマイアの日記にも見られる。

一方、ライダーとネヘマイアとの間で異なっているのは、宗教と富の対立に関する悩みである。ネヘマイアは、そこまで経済的成功に恵まれず、余剰の富を手に入れることができなかった。一方、ライダーは、事業が軌道にのった結果、余剰の富を獲得することができた。しかし、正当な手段で得られた富であったにもかかわらず、それはライダーにとって神の祝福とはならなかった。逆に、ライダーは富者になると地獄に落ちると考えたので、余剰の富が不安の源となってしまった。ライダーはそうした不安から逃れるため、富の捌け口を探していた。その捌け口は慈善であった。ただし、働く能力のある人間に金銭を寄付すべきではないとライダーは考えていた（山本2017: 108）。

山本は、ライダーが余剰の富を再投資に回さなかった点を取り上げ、ヴェーバーの理論を批判している（山本2017: 109）。ヴェーバーの理論によると、消費の圧殺と営利の解放によって資本形成がなされることになる（Weber 1920=1989: 345）。しかし、ライダーは、前半の消費の圧殺の部分には当てはまるが、後半の営利の解放という点においては適合しなかった。山本によれば、ライダーは利潤追求に対して終始警戒していたようだ（山本2017: 108）。

ライダーの例に見られるこれらの要素は、ヴェーバー・テーゼと異なる資本主義の精神につな

がる可能性がある重要なものである。確かに、山本が指摘したように、ライダーは利潤を再投資に回さずに慈善に使ったので、資本形成に寄与しなかった。しかしながら、事業を続けることにより、悩みの種となる富を作り出してしまうことを考えれば、ライダーが事業を続けていくことは不可解に思える。では、なぜライダーは、自分を地獄にも落とす恐れがある富を生み出す事業を諦め、他の神の意思を実現する道をなぜ探さなかったのだろうか。「利潤への欲求と、宗教心が命じるところのものとの折り合いをつける必要が、ライダーの経済生活の全体を貫いていた。…彼の生涯の中心的関心事は、…世俗の経済活動の抑えきれない要求との関係において、自分の魂がどのような運命をたどるか、であった」(Jacob and Kadane 2003: 29) というのが、カデインとジェイコブの解答である³⁾。この解答は、神からの要求の間に板挟みになるライダーの様子が見られるという点において示唆的である。ライダーはその板挟みに対して、余剰の富を外部へ放出することによって解決しようとしたのである。

1-5. 富の放出の動機と利潤の再投下

以上のようなライダーの行為とそれを駆動した動機は、決してヴェーバーがいう合理的なものであるとはいえない。営利の解放と消費の圧殺というヴェーバー流の説明によっては、ライダーが置かれていた神の命令と利潤との間の板挟みの状態を十分に説明できないのである。特に後者の消費の圧殺と資本の再投資の必然的な因果関係については、ヴェーバーは十分に展開しえなかった。

利得したものの消費的使用を阻止することは、まさしく、その生産的利用を、つまりは投下資本としての使用を促さずにはいなかった。この作用がどの程度の強さだったかを正確に数字によって確かめることは、もちろんできない。(Weber 1920=1989: 345)

確かに、消費の圧殺は、富が蓄積されることの説明にはなるだろう。しかしながら、その蓄積された富が、資本として再投下される動機については明確になっていない。また、蓄積された富の中でもどの程度の割合が投下されるのかということについても、ヴェーバー自身明らかにしていないのだ。

一方、ライダーの例を見れば、富を再投下する動機は明確である。しかも、その動機は資本の再投下を必然的に、なおかつ永続的に引き起こすのである。まず、正当な手段によって手に入れた富はライダーの不安⁴⁾を引き起こす。この不安はライダーに余剰の富を外に放出させる。このとき、少しでも余剰の富が残ったら、それは彼の不安を引き起こすはずなので、余剰の富は全て外に放出されると考えられる。ライダーの事例では、余剰の富は放出されたが、その富は投資に回されなかった。しかし、彼と同じように富に対する不安を感じ、ライダーとは異なった投資という形で余剰の富を放出した人物がいた。アメリカ史上の最大の大富豪、ジョン・ロックフェラーである。

2. 隣人愛と「資本主義の精神」

2-1. ジョン・ロックフェラーと資本主義

周知のように、ジョン・ロックフェラー（1839-1937）は、スタンダード・オイルの創業者であり、石油王として知られている人物である。ロックフェラーが死去したとき、彼の財産は14億ドルであった。フォーブスによると、2007年の価値に換算して、その価値は6634億ドルである⁵⁾。ロックフェラーとよく比較される「鋼鉄王」のアンドリュー・カーネギーの財産が2007年の価値に換算すると2983億ドルであることを考えれば、その莫大さが想像できるだろう。

これまでの研究は、ロックフェラーの事業の成長と資産の形成に関するストーリーが重視されてきた傾向にある。しかしながら、こうした研究は、ロックフェラーの経営術といった外面的な部分ばかりに焦点を当ており、彼の内面に着目するにしても、強欲さといった性格が強調されてきただけである。このように、ロックフェラーの内面には十分な焦点が当てられてこなかった。彼の伝記を新たに執筆した著述家ロン・チャーナウによると、それまでの伝記は、彼の事業拡大とトラスト法との戦いに着目してきた。また、彼に対する評価は、彼の貪欲に着目して徹底的に批判するか、彼の慈善事業に注目して彼を聖人のように褒め尽くすかという両極端なパターンに分かれる。だが、チャーナウによれば、どちらの説明もロックフェラーの真の姿を十分に掴んでいないという（Chernow 1998=2000a: xii）。そのため、チャーナウは、外面的な要素を重視する説明を修正し、ロックフェラーの内面と外面をバランスよく捉えようと試みた。

チャーナウは、ロックフェラーの内面を知るため、ニューヨーク州スリーピー・ホローにあるロックフェラー・アーカイブセンターを訪れ、そこで1917年から1937年にかけてロックフェラーがプライベートで行ったインタビューの記録を発見した。このインタビューを行ったのはニューヨークの新聞記者ウィリアム・イングルズである。元々、700頁に及ぶインタビューの資料に基づいた伝記が出版されるはずだったが、結局実現しなかった。チャーナウの考えでは、この資料の中で最も注目すべきなのは、ロックフェラーの信仰である（Chernow 1998=2000a: xii）。

ロックフェラーにまつわる最大の謎の一つは、手段を選ばずに競争相手を潰してきた悪徳企業家という面と、聖書を熱心に奉じる敬虔なプロテスタントの信徒という面がなぜ同居できたのかという点である。チャーナウによれば、彼が熱心なバプテスト派信者であることが、この謎を解く鍵だという。従来の研究においては、彼の信仰は、隠れ蓑や罪を償う手段に過ぎないと考えられてきた（Chernow 1998=2000a: Xii）。それに対してチャーナウは、ロックフェラーの信仰は利潤追求という行為を正当化・支持するものだとして主張している（Chernow 1998=2000a: 272）。ここで重要なのは、ロックフェラーにおいて信仰と利潤追求とが一体化しているという事実が、まさにヴェーバー・テーゼに適合するものだというチャーナウの解釈である（Chernow 1998=2000a: 109）。以下では、こうしたチャーナウの解釈を下敷きにロックフェラーにおける隣人愛の問題を考えていくことにしよう。

2-2. ロックフェラーの事業と隣人愛

ロックフェラーにとって、仕事を通じて得られた富の管理は、神に委託され仕事である (Chernow 1998=2000a: 106-7)。この神の管財人というプロテスタンティズムの考えは、ヴェーバーも指摘している (Weber 1920=1989: 339)。また、ロックフェラーの人生は家庭・事業・信仰だけで完結し、あらゆる娯楽が排除されていた (Chernow 1998=2000a: 96)。つまり、プロテスタンティズムの倫理による自己監視と禁欲がなされていたのである。ヴェーバーが指摘した世俗内禁欲と勤勉な職業労働という要素が、ロックフェラーの言動にも見られるのだ。

しかし、ロックフェラーの信仰には上記と異なる側面がある。ロックフェラーは、プロテスタントの中で予定説を否定したバプテスト派の信者である。また、バプテスト派の教義においては、全ての人間が救われる可能性があるという平等主義が説かれている。その教義の影響下で、ロックフェラーは誤った道を進んでいる他の人間を救わなければならないと考えていた (Chernow 1998=2000a: 44)。これらの事実によって、なぜロックフェラーが競争相手に対して容赦のない振舞いをしたのが理解できるようになる。このロックフェラーの考えを踏まえれば、彼の事業における競争相手に対する容赦のない行動を理解できるようになる。

トラストの帝王としてのロックフェラーのキャリアは、彼にしてみればキリスト教徒の伝道の物語であり、いわば『天路歷程』[ヴェーバーも参照したプロテスタントベストセラー——引用者注]、模範的人物であるロックフェラーが罪深い精油業者を誤った道から救い出す物語だった。(Chernow 1998=2000a: 273)

ここからわかるのは、彼にとって、非合理的な企業を減らすのは競争相手を救うためであったということである。互いに競争し続けると、価格競争で共倒れする可能性がある一方で、全ての業者が統一されたら効率的で合理的な経営ができるようになり、継続的に安い商品を提供できるようになるからだ。ロックフェラーにとって、ライバルを買収したり倒産させたりすることは、競争相手と業界全体のためであった (Chernow 1998=2000a: 273-4)。

さらに、ロックフェラーの信仰の特徴として注目すべきなのは、カルヴィニズムと異なる金銭に対する態度である。ロックフェラーは、獲得した富を救いの確証とも、神の祝福とも見なさなかった。ロックフェラーにとって、他人を救済するという目的によって正当化されない富は、周りの人間からみれば貪欲の象徴であり、汚れた存在であり、使い方次第で富は呪いになる可能性がある (Chernow 1998=2000a: 533)。ロックフェラーは、富が正当なものになるかどうかは、その使い方次第だという信念を持っていた。この信念の由来は、職業労働によって得られた富は正当なものだというカルヴィニズムの考えにはない。それは、「できる限り獲得せよ、できる限り蓄積せよ、できる限り与えよ」という、メソジスト派のジョン・ウェスレーの三原則に由来する。

2-3. 隣人と金銭の救済

ロックフェラーの事業に対する使命感は、周りの人間を救済するという考えに由来しているだけでなく、神に託された金銭を救済するという考えにも由来している。この考えは、カルヴィニズムの教義よりもジョン・ウェスレーの教義に近いものだが、ヴェーバーはウェスレーの教義をそれほど重視していない（Weber 1920=1989: 261-2）。だが、ロックフェラーは、ウェスレーの三原則「できる限り獲得せよ、できる限り蓄積せよ、できる限り与えよ」を終身のモットーにしていた（Chernow 1998=2000a: 107）。ヴェーバーもこの三原則を引用したが、彼が注目したのは第一・第二原則のみである（Weber 1920=1989: 352-3）。岸田紀は、ヴェーバーが第三原則「できる限り与えよ」を、資料操作によって意図的に過小評価した可能性を指摘している（岸田 1977）。しかし、この批判は、ヴェーバーへの決定的な批判にはならないものとされてきた（山本 2017: 306）。「できる限り獲得せよ、できる限り蓄積せよ」という第一・第二原則のみで、勤勉な職業労働と消費の圧殺の宗教的な背景が説明できるため、「資本主義の精神」の証明にはそれで十分だと考えられてきたからである。だが、ロックフェラーの事例と併せて岸田のヴェーバー批判を検討することで、第三原則の重要性が明らかになる。また、ロックフェラーの事業と慈善活動を理解する上でも、この第三原則は鍵となりうる。

ロックフェラーの事業目的は、周りの人間を救済することである。この目的を達成するためには、多くの金銭をできる限り獲得・蓄積しなければならない。そして、金銭の獲得と蓄積は救済という目的によって正当化されている。すなわち、救済という目的を表す「できる限り与えよ」という第三原則は、第一・第二原則を駆動している。この第三原則を忠実に実践したため、ロックフェラーはアメリカ史上最大の資産家となったのみならず、史上最大の慈善家にもなったのである。「彼の心のなかでは、儉約と慈善が一体となっていたのだ」（Chernow 1998=2000b: 596）。この言葉からも分かるように、「できる限り蓄えよ」という原則は、「できる限り与えよ」という原則に規定されている。また、ロックフェラーの事業と慈善活動の根底には、常に「神が人類のためにわが財産を授けて下さったのだ」（Chernow 1998=2000b: 215）という信仰がある。すなわちロックフェラーは、信託物である金銭を有効に利用しなければならないという使命感を持っていたのである。

ここで留意すべきなのは、ロックフェラーの慈善活動とライダーの寄付行為との違いである。ライダーの場合は、余剰の富に悩まされた結果として、金銭を単に寄付することにとどまった。寄付金はどう運用されるのかについては、ライダーは関心を持たなかったためである。一方、ロックフェラーの場合は、慈善活動も一つの事業であったため、寄付金はどう運用されるのかを確認した上で、寄付していた。「寄付をちゃんと価値のあることに使ってもらえるのかどうか、できるだけ綿密に調査しなければ、安心して出せない」（Chernow 1998=2000b: 570）と、ロックフェラーは述べている。彼にとって、生産的な成果を上げない寄付は、神に託された金銭を無駄遣いすることも同然である。金銭を無駄遣いから救済するという考えは、寄付という行為においても同様に確認できるのである。

2-4. 金銭の救済とジョン・ウェスレー「三原則」の解釈

ロックフェラーは、隣人を救うという目的でライバルを潰すような容赦のない事業を行ってきた。そこには、単に隣人を救済するという目的だけではなく、金銭の救済というもう一つの目的が含まれていた。清水俊毅が明らかにしているように、金銭の救済という目的は、ジョン・ウェスレーの晩期の思想にも見られる（清水 2013：188-9）。清水によると、ウェスレーの第二原則の従来の訳（「できる限り蓄積せよ」）は、ウェスレーの意図を十分に反映していない。第二原則の原文は「save all you can.」である。これは従来の研究において、「できる限り蓄積せよ」（野呂・清水ら神学研究家訳）と「できる限り節約せよ」（岸田紀訳）の二通りに訳されてきた。ここで重要になるのは、ウェスレーが「save money」と「lay money up」とを明確に区別して用いているという清水の指摘である。後者は文字通り、蓄積や節約といった意味である。しかし、ウェスレーの後期の思想の展開を踏まえれば、前者には「金銭を救う」という意味が含まれていると考えられる（清水 2013：188-9）。この清水のウェスレー解釈は、ロックフェラーの信念と行為を解釈する際にも有効である。

無駄遣いされている金銭を救済するというロックフェラーの行為は、周りの人間を救済するという目的に対応しており、これは第三原則「できる限り与えよ」に対応している。この目的の達成には、非合理的で非効率な経営によって無駄遣いされている金銭を、競争相手から出来る限り取り上げることが必要である（できる限り獲得する、できる限り（金銭を）救済せよ、蓄積せよ）。「最優の道具たる金銭をこの世への欲望による浪費空費から救うことで結果的に貯蓄される」（清水 2013：188）と清水が指摘しているように、金銭を救済する結果として金銭が蓄積され、救済と蓄積という「Save all you can」の二つの含意が同時に達成されるのである。

2-5. ウェスレー第三原則の意義

以上の議論から明らかになるのは、ウェスレーの第三原則が、利潤追求を駆動する大きな原動力となっているということである。先にも見たように、第三原則は第一・第二原則の目的となっている。第三原則の重要性は、ウェスレーの以下の言葉からも明らかである。

「できる限り利得し、できる限り貯蓄する」ことによって、—— もしもここで止まってしまったならば—— 何かを果たしたなどと誰も想像してはならない。もしも彼がこのすべてをもっと先の目標に向けないならば、このすべては無意味である。また実際のところ、ただ使わずにたくわえておくだけならば、何かを貯蓄するとは当然言い得ない。それなら、あなたの金銭を海に投げ棄てても、それを地に埋めても同じことである。使わないことは、結果的に言ってそれを捨てることである。それ故に、もしもあなたが「不正の富を用いてでも、自分のために友だちをつく」（ルカによる福音書十六の九）ろうと真に思うならば、第三の規則を前二者に加えなければならない。第一にできる限り利得し、第二にできる限り貯蓄したならば、その次には「できる限り与え」なければならない。（Wesley 1951=1972: 187-8）

確かに、順序としては、与えるのは利得と貯蓄がなされた後である。だが、第三原則がなければ、第一・第二原則が無意味になるとウェスレーは考えていた。そして、ウェスレーの三原則をモットーとしたロックフェラーは、自らの事業を救済として位置づけ、ライバルの富を奪い、手に入れた金銭を有効に使用するという形で、第三原則によって第一・第二原則に基づく行為を正当化した。このことは、ウェスレーの三原則の忠実な実践であると考えられることでもあるだろう。

一方、ヴェーバー・テーゼにおいては、資本主義の発展の背景を説明する上で重視されるのは第一・第二原則のみである。すなわち、救いが欲しければ勤勉に労働し（できる限り獲得せよ）、労働から生産された富をいたずらに消費せず禁欲する（できる限り節約せよ）という一連のプロセスが重視されている。このプロセスによって、意図せざる結果として資本主義が発展したというのが、ヴェーバー・テーゼの要である。このことからすれば、「できる限り与えよ」という第三原則が重視されなかったのも何ら不思議ではない。しかし、ロックフェラーの信念とそれに基づく行為は、ウェスレーの第三原則と深く関わるものである。その点からすれば、ヴェーバーが軽視したウェスレーの第三原則を、資本主義の精神とプロテスタンティズムとの関係を考える上での重要な要素とみなすことができるだろう。

しかしながら、ウェスレーの三原則を外面的な行為の上で忠実に守ることのみが、大富豪ロックフェラーを生み出したのではない。ロックフェラーの内面は、ウェスレーの教えに従って行動するのみでは安らかにならなかった。むしろ彼は、教えに従い行動し続けるという外面的な行為の裏で、内面の苦痛に耐え続けたのであり、その苦痛こそが金銭獲得の原動力として重要な意味を持っていたのである。この苦痛は、彼の先人たちの信仰日記に見られるものと同じく、人間の本性たる欲望と禁欲との葛藤から生ずるものであった。

2-6. ロックフェラーの富に対する苦悩

神の信託物である金銭を競争相手から取り上げたロックフェラーは、ライダーと同じく富に悩まされるようになった。ライダーとロックフェラーの行為は、ウェスレーの第三原則「できる限り与えよ」によってある程度説明できる。しかし、「できる限り」という漠然とした規定によっては、ロックフェラーが驚異的な速さで莫大な寄付を行った理由を十分に説明できない。それは「できる限り」という程度にとどまらず、余剰の金銭をほとんど出し切るものであった。チャナウによると、ロックフェラーが財団設立後の10年間（1909～1919年）に寄付した金額は、アンドリュー・カーネギーが全生涯の間に寄付した金額（3億5000万ドル）に相当するという（Chernow 1998=2000b: 385）。全ての富豪をはるかに超える額を寄付したことで、ロックフェラーはアメリカ史上最高の慈善家となった（Chernow 1998=2000b: 386）。以上のようなロックフェラーの行為には、金銭を自分の元に留めておいてはならず、外部へと放出しなければならないという強迫性が見られるものであり、それを突き動かす何らかのものが潜んでいるように思われる。その手がかりとなるのはライダーの日記である。

ライダーの日記にすでに見られるように、手元に余剰な金銭があることは悩みの種となる。た

だし、ロックフェラーはライダーよりはるかに大きな負担を感じたと考えられる。チャーナウによると、ロックフェラーは、「多大な富は多大な重荷であり、多大な責任だ。しかも、決まって次にあげる二つのうちの一つになる。大いなる祝福か、大いなる呪いか、このどちらかだ」(Chernow 1998=2000a: 533) と述べたという。この「呪い」は、金銭を死蔵することを意味するため、金銭をできるだけ速やかに懐から出す動機となる。だが、ロックフェラーの場合、その金銭の膨大さ故、使い道を見つけるのは容易ではない。「ロックフェラーは富の増加に合わせて寄付を増やしていくのが難しいことに気づいていた——この問題が精神的に大きな負担となるほどだった」(Chernow 1998=2000a: 216) と、チャーナウは指摘している。寄付が困難なものとなった理由は、単に金銭を手離すのではなく、有意義なものに寄付しなければならないとロックフェラーが考えていたからである。

2-7. キリストに捧げる自己犠牲

以上のようなロックフェラーの悩みに関しては、大きな資産を手に入れなければそうした悩みが消えるのではないか、なぜ自らを苦しめるものを手に入れようとするのかという疑問が浮かぶだろう。これまで見てきたロックフェラーの信仰と価値観に従えば、彼は周りの人間を救うことへの使命感を持っているがゆえに、事業拡大をやめられないのだ、と答えることができるだろう。確かに、この答えを裏付けるロックフェラーの次のような言葉がある。「もっともっと金を稼ぎ、その金を良心に従って隣人のために使わなければならない」(Chernow 1998=2000a: 273)。また、彼は自分の事業を「世界じゅうの消費者にとって大きな意味を持つ救済事業」(Chernow 1998=2000a: 274) とも位置付けている。

だが、以上の答えは、ロックフェラーの金銭獲得を正当化する理由に過ぎない。では、なぜ彼は自らを苦しめるものを求めるのだろうか。その手がかりの一つは、彼がモットーとしたウェスレーの教義にある。ウェスレーの教義において、自らの本性が最も欲しいものを自ら進んで禁じることは、自分の「十字架を取り上げる」ことである。自らの本性を否定することは「剣を突き通すような」非常に辛いものである。にもかかわらず、その辛さは自らの病を癒すための苦い薬である(Wesley 1951=1972: 134-5)。ここで注意が必要なのは、ウェスレーが「十字架を取り上げる」ことと「十字架を負う」ことを区別している点である。「十字架を取り上げる」とは、自らの本性が欲するものを認めた上で否定することであり、その否定は苦しみを伴う。一方、「十字架を負う」とは、自分の意思と関係なくのしかかってくるものに耐えることに過ぎない(Wesley 1951=1972: 136-7)。ウェスレーが評価しているのは前者である。前者は、自分の本性に従わず、神の意思に従うという意思表示だからである。

以上の整理から、ロックフェラーが自分を苦しめるものをあえて手に入れようとした理由がわかるだろう。富を得てなおかつそれを放棄することは、自分の「十字架を取り上げる」ことにあたり、それが彼にとって神に従う意思表示を意味するためである。ロックフェラーにとっての「十字架」は、彼の金銭への欲望と富に対する野心である。チャーナウによれば、ロックフェ

ラーの父親はよく一束の現金を息子に見せたり、自慢したりしたという。(Chernow 1998=2000a: 51)。また、ロックフェラーが若い時、ある日初めて信じられないほどの額の銀行券を見た後、何度も金庫を開けてその銀行券をうっとりと眺めたというエピソードもある。さらに、ある日彼が年上の実業家に向かって「いつかお金もちになってみせます。絶対になってみせます。絶対です」(Chernow 1998=2000a: 93-4)と述べたエピソードもある。

以上の検討から分かるのは、ロックフェラーが金銭に対して、人並外れた欲望と野心を抱いていたということである。こうした欲望と野心を抱えたロックフェラーがいかなる神の指示をうけたのかということについては、以下の寓話が参考になろう。

われらの主があふめる青年に「帰ってあなたの持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい」(マタイによる福音書十九の二一)と言われた時に、(主はここで、これのみが、この青年の強欲をいやす唯一の手段であると、十分に知っておられたのである。)そういうことを考えるだけでも、その青年にとっては非常な苦痛であったので、「青年は悲しみながら立ち去った」(マタイによる福音書十九の二十二)。彼は、地上における財産と別れるよりも、むしろ天の希望と別れることを選んだのである。(Wesley 19510=1972: 136)

この寓話はまるでロックフェラーのために書かれたかのようなものである。ただしロックフェラーは、あふめる青年とは対照的に、「非常な苦痛」が伴う「天の希望」を選んだ。しかも、この「非常な苦痛」は、ウェスレーの教えによれば「十字架を取り上げる」ことであり、病を癒す薬の苦さと同じ肯定的なものである。この寓話に従って「天の希望」を求めるのであれば、ロックフェラーは単に自分の富を断念するだけではなく、貧しい人々に施さなければならないのだ。実際に、以下のエピソードは、この心理と行為を裏付けるものである。

2-8. 隣人愛と自己犠牲

起業する前のロックフェラーはかつて、ヒューイットという人物の下で働いていたことがある。ある日、ヒューイットがロックフェラーの給料を大幅に上げたところ、ロックフェラーはこの昇給に何か気が咎められ、「罪人にでもなったような気がした」と述べたという。このことについてチャーナウは、「ロックフェラーは喜ぶと同時に、教会の教えに照らして、自分の欲深さに良心の呵責を覚えたのだらう」と結論づけている(Chernow 1998=2000a: 94)。

この昇給のエピソードにおいて注目すべきなのは、ロックフェラーの内面において罪悪感が引き起こされたという点である。能力が評価されて引き上げられた賃金は、ヴェーバー・テーゼに従えば、当然に正当なものである。しかし、ロックフェラーはこの正当な賃金に対して罪悪感を覚えた。自分の能力が評価されたことに対して喜ぶのは自然なことであろう。それと同時に彼が感じた罪悪感は、自分の金銭に対する欲望からだけでなく、必要以上の金銭を得ていることから生まれたと考えられる。なぜなら、ロックフェラーの属したバプテスト派は、隣人を救済する

ことを勧めているからだ。隣人愛という観点から見れば、なぜロックフェラーが自分を咎めているのが理解できる。必要以上の金銭を自分が得れば、世の中でこの増加分を必要とする他人がいるのではないかとロックフェラーは考えただろう。「自分自身の服装の費用を切り詰めるか、あるいは、もっと安上がりの、今までほど楽しめない食事をしない限り、彼には飢えるものに食事を与え、裸の人に着物をきせることができない」(Wesley 1951=1972: 143) というウェスレーの説教は、以上のような考え方を示唆するものである。ウェスレーの言葉からは、自分が犠牲を払わなければ、隣人の利益が損なわれてしまうという考えが見て取れる。この考えは、まさにウェスレーの「十字架を取り上げる」という教えに対応している。つまり、自分の欲望を犠牲にするという形で「十字架を取り上げる」ことなしに、愛されるべき隣人は救われないのだ。こうした論理は、「もっともっと金を稼ぎ、その金を良心に従って隣人のために使わなければならない」というロックフェラーの言葉に端的に示されている。彼の「良心」によって、自分が努力して稼いだ金銭を隣人に与えるという行為が引き起こされるのである。

2-9. 隣人愛による金銭獲得と再投資（自己犠牲）

ロックフェラーの心理に関する以上の考察は、プロテスタント信者にしばしば見られる超人的な禁欲を説明することに寄与する。自分が最も愛するものを無条件で他人に与えるということには、とてつもない苦痛が伴うことが想像できる。しかし、この苦痛はこうした自己犠牲の行為に歯止めをかけるものではなく、それが自分の病を治すためのものだとして解釈されることによって、その行為を強化する可能性すらある。そうすると、信者は自分の欲望を覚えるたびに、この苦痛が伴う行為を求める可能性がある。また、その行為に伴う苦痛は、信者の欲望が強ければ強いほど、大きくなると考えられる。従って、ロックフェラーが他の信者より資本主義の精神に適合している理由は恐らく、金銭に対する欲望という十字架が誰よりも重いためであろう。

欲望を禁じる苦痛は、ネヘマイアにも見られる。また、余剰の富によって引き起こされた世俗的欲望と宗教的な要求の間にある葛藤は、ライダーにも見られる。ロックフェラーはその苦痛と葛藤をうまく融合し、信念と行為を一致させることができた。十字架を取り上げる苦痛の意義は、隣人を救済することにある。またその苦痛は自分の救いようのない欲望を治すためのものであり、正しいのだと解釈される。以上の関連を整理すると、次のようなプロセスが考えられる。

人間はその本性から、金銭に対する欲望と野心によって金銭を手に入れようとする。しかしながら、ウェスレーの教えによれば、手に入れた金銭によって罪悪感が引き起こされてしまうので、その罪悪感を消す手段として、愛する金銭を隣人の救済に使うことが必要になる。そこで、金銭への欲望は隣人の救済という目的によって正当化され、金銭を手離す苦痛も隣人の救済という意味を持つようになる。隣人を救済するという目的のために大量の金銭が必要とされ、正しいと思われる苦痛を得るためにその金銭は放棄される。つまり、本性の欲望と野心を「断念せよ」という意義は、「隣人を救え」と救うために「営利せよ」⁶⁾によって生み出される。以上のような連関とプロセスはまさに、ウェスレーの三原則を実現するものであり、「もっともっと金を稼ぎ、そ

の金を良心に従って隣人のために使わなければならない」というロックフェラーの言葉によって端的に表現されるものである。

3. ヴェーバー・テーゼの再検討

3-1. 共通点の整理

以上の3人のプロテスタント信者の事例を踏まえた上で、ヴェーバー・テーゼとの相違点を再検討したい。まず、3人はともに予定説を重視していなかった。彼らは、自分が神に救われるものだ⁷⁾と信じていた。次に、彼らの禁欲は、絶え間なく生まれてくる欲望とそれを無くそうとする禁欲という一つの共通の構造を持っていた。この構造が成り立つには、先立って欲望が存在しなければならない、その欲望が強ければ強いほど、禁欲によって生まれてくる力が大きくなるという特性も持つ。そのため、ネヘマイアとライダーがロックフェラーのような莫大な富を築くことができなかったのは、様々な外的要因もあろうが、元になる欲望の大きさと、その反映たる行動力の違い故だろう。

最後の共通点は、彼らが死ぬまで欲望との闘いを終わらせなかったということだ。ネヘマイアは晩年まで性欲と戦い続けた。ライダーは「利潤追求の経済活動と信仰生活という、本来矛盾する2つの事柄を両立させることに苦しみ続けた」(山本 2017: 108)。その両立を隣人愛などの正当な理由で成し遂げたように見えるロックフェラーすら、死去するまで増え続ける資産の運用に苦心したのである。

3-2. 予定説による心理的起動力との齟齬

以上の3人の事例から抽出した共通点を踏まえた上で、ヴェーバー・テーゼを再び検討してみよう。まず、ヴェーバー・テーゼの中で最も重要なのは、信者に絶望感を与える予定説であろう。この予定説が引き起こす不安を無くそうと意図することは、すべての行為の心理的起動力となる(Weber 1920=1989: 219)。その不安をなくす最適な手段が、天職としての職業労働である。その職業労働を通じて得られた賃金は正当なものであり、神の祝福であるとまで信者は考えるようになる(Weber 1920=1989: 236)。そして、世俗内の禁欲によって、稼いだ賃金が蓄積されていく。そしてその賃金の消費が圧殺されることによって、生産への再投資が行われるとヴェーバーは考えた(Weber 1920=1989: 345)。以上のことからわかるように、一連の行為の起点となるのは予定説に付随する不安である。

この点に関して、ヴェーバー・テーゼがネヘマイアとライダーには当てはまらないことを山本は指摘している(山本 2017: 109)。そして、先述したロックフェラーも、同じくヴェーバーの予定説には当てはまらないだろう。ロックフェラーは自分がすでに選ばれていると考えていた。彼の事業目的は、自分の救いを得ることではなく、あくまでも隣人を救済することであった

(Chernow 1998=2000a: 106-7)。

予定説を信じずに自分が救われることが決まっていると考える、以上のような信者の理念型についてヴェーバーは言及してはいたものの、彼は予定説を信じて勤勉な職業労働を行うというもう一つの信者の理念型を重視した (Weber 1920=1989: 178-9)。ヴェーバーが前者の理念型を詳細に展開しなかった理由は不明であるが、おそらくロックフェラーのような事例は特殊な事例であり、ヴェーバーが重視する「近代独自の資本主義『精神』が大量現象として」(Weber 1920=1989: 54 強調原文) 出現する事例ではないと考えたのではないかと思われる。しかしながらヴェーバーは、資本主義の精神を代表する理念型を説明する際に、ロックフェラーのような企業家を念頭に置いたと思われる部分がある。「こういう企業家は、巨富を擁しながら、自分のためには「一物をも持たない」、——ただ良き「天職の遂行」*»Berufserfüllung«* という非合理的な感情をもっているだけなのだ」(Weber 1920=1989: 81) とヴェーバーは述べている。こうした企業家像はジョン・ロックフェラーを想起させる。しかし、ロックフェラーは予定説を信じておらず、自分の救いより他人を救済することを目的にしていたのであり、ヴェーバーの予定説による不安を心理的起動力とする理念型には適合しないだろう。

では、予定説による不安を持たない3人の行為の心理的起動力となったのは何であろうか。以上の考察から、それは罪悪感をなくそうとしたことであるといえるだろう。3人とも、現世の楽しみに繋がる欲望を感じた後、直ちに罪悪感を覚えた。ウェスレーによれば、この罪悪感に残存する罪である。そのため、彼らは、その罪悪感をなくすために、欲望を感じさせる対象物を切り離すのだ。ここで留意すべき点は、この罪悪感をなくす禁欲という一連のプロセスは、生きている限り不断に生じる欲望に対応して、繰り返し起こるものだという点である。これはシーバーがいう「終わらない闘争」である (Seaver 1985: 31)。ただし、ロックフェラーにおいてこのプロセスは他の2人より複雑だ。ロックフェラーの場合、隣人愛の実践という目的が明確になっており、それが彼の行為を正当化するものにもなっていた。また禁欲による苦痛はこの隣人愛という目的を強化したり支えたりすることもあった。いずれにしても、彼らの心理的起動力は自分の救いを得るためでなく、中世カトリックの伝統に根付く罪悪感と原罪と、信者の心理に関わると考えられる。この関連については、さらに検討する必要があるだろう。

3-3. 宗教心の喪失との齟齬

もう一つ検討すべきなのは、信仰に由来する心理的起動力は世俗の富の誘惑によって消える運命を持つというヴェーバーの主張である。ヴェーバーは、宗教心がなくなると、資本主義の精神がひとり歩きし始めると考えた。その心理的起動力を代替するのは、スポーツ的競争と現世的功利主義、機械的基礎であるとされる (Weber 1920=1989: 355-366)。すなわち資本主義社会は、その起動力となった宗教心を必要とすることなく、世俗の論理のみによって運営されていくのだ。

しかし、本稿で指摘した事実とその事実が持つ意義によれば、富の誘惑によって宗教心が蝕まれることはない。3人とも、最後まで各自の欲望と戦っていた。また、ネヘマイアとライダーは

終始富を警戒していた。ロックフェラーは、ウェスレーの教えに従い、彼自身の富に対する野望に対抗し、巨万の富を持ちながら富に宗教心が蝕まれない方法を見付けた。その方法は、ウェスレーが最も重視した教えに基づいて、「できる限り与え」ることである。またこの「できる限り与えよ」はロックフェラーの内面における戦いによる苦痛によって強化され、支えられる。すなわち、ロックフェラーの事例においては、富は彼を腐敗させるものではなく、むしろ彼を鍛えるものであった。

また、資本主義との関連において、ロックフェラーの目的とジョン・ウェスレーの「できる限り与えよ」に見られる、隣人愛というキリスト教の概念の重要性は再度評価する必要があるだろう。ヴェーバー・テーゼにおいては、他者に対する隣人愛的な救いよりも、まず自分の救いが大事だと前提されているからだ。しかし、真のキリストの信者がキリストの生き方に倣おうとするならば、自分の救いを得ようとするより、むしろ全ての人間のために自分を犠牲にしようとするのではないだろうか。

4. 終わりに

本稿はこれまで、プロテスタント信者の信仰日記と、プロテスタント信者である大富豪ロックフェラーの伝記を用い、ヴェーバー・テーゼとの相違点を明らかにしつつ、その意味を検討してきた。

本稿で得た成果はヴェーバー・テーゼを修正するものではなく、それに疑問を呈するものである。第一の疑問は、予定説とは別の「心理的起動力」が存在する可能性があるのではないかということであり、第二の疑問は、宗教心は富に蝕まれ消えるどころか、永遠の禁欲による苦痛と禁欲の対象によって強化される可能性があるのではないかというものである。

これらの疑問に答えることによって、絶え間ない利潤追求を支える精神はどこから生まれたのかという問題を解明することができるだろう。この問題を解明する際に、最も重要なキーワードは「隣人愛」である。この概念は、今まで資本主義と相容れないものだと思われてきた。自らの欲望に反する利他的な行為を勧める「隣人愛」と、利己的な欲望を最大限に活用する資本主義というシステムは、一見すると水と油のような関係に思える。しかし、ライダーが余剰の富を放出した理由は、利他的な理由ではなく、自分の不安と悩みをなくすという利己的な理由である。また、そのライダーと同じ悩みを抱えていたロックフェラーは、アメリカの資本主義の礎を築いた人物である。ロックフェラーの事業に対する原動力の一つに、隣人を救済するという目的があったことを考えると、「隣人愛」は資本主義というシステムと全く親和性を持たないとは言い難い。逆に、「隣人愛」が大義名分になることによって、資本主義における事業拡大と利潤追求が正当化されてしまう可能性すらある。

しかし、各個人からすれば利他的に思える行為であっても、全人類と全社会の規模から見れば、それは投資だと見なすことができないだろうか。利他的に富を手離しているようでいて、全体と

して見れば富の総量は増加していることになるのである。この理由から見ると、「隣人愛」は資本主義社会にとって無縁ではないと思われる。

以上は「隣人愛」という概念と資本主義社会の関連の可能性を示すものである。以上言及した関連——「隣人愛」の「心理的起動力」の仕組みと、この仕組みと資本主義社会との関連——についてはさらに追究しなければならない。以上の課題を解明することによって、宗教と折り合いが悪いと見なされがちな資本主義にはまだ「信仰」が残存していることが明らかになるだろう。その時、資本主義の真の姿が見えてくるはずだ。

註

- 1) p 236 において、労働の成果が神の祝福だと信者に思われるようになったと述べている。p 344 において、富は神の恩恵だという言い方がなされている。
- 2) 以上の文献の日本語訳は、山本通による訳を参照した。
- 3) 山本の訳を引用した（山本 2004c : 10）。
- 4) ヴェーバー・テーゼにおける救いへの不安は、自分が選ばれているかを確かめられないから生じるものである。一方、ここで言及した不安は、神の子として救われている自分が、もし余剰の富を持つことで神の期待を裏切り、地獄に落とされるのではないかというものである。
- 5) <https://money.cnn.com/galleries/2007/fortune/0702/gallery.richestamericans.fortune/index.html> (2019 年 8 月 13 日閲覧)
- 6) ヴェーバーの用語を借用した。ただし、ヴェーバーは「断念せよ」から「営利せよ」の転換は「隣人愛」ではなく、天職としての「職業」によるものだと考えた（Weber 1920=1989: 341）。
- 7) ライダーは他の 2 人ほど確信を持っていないが、予定説を信じていないため、予定説による不安が見られない。

参考文献

- Brentano, Lujo, 1923, *Der Wirtschaftende Mensch in der Geschichte: Gesammelte Reden und Aufsätze*, Leipzig: Felix Meiner. (= 1941, 田中善治郎訳, 『近世資本主義の起源』, 有斐閣.)
- Charles, George and Katherine, George, 1961 *The Protestant Mind of the English Reformation 1570-1640*, New Jersey: Princeton University Press.
- Chernow, Ron, 1998a, *Titan: The life of John D. Rockefeller, SR*, New York City: Random House. (= 2000, 井上廣美訳, 『タイタン ロックフェラー帝国を創った男 (上)』.)
- 1998b, *Titan: The life of John D. Rockefeller, SR*, New York City Random House. (= 2000, 井上廣美訳, 『タイタン ロックフェラー帝国を創った男 (下)』.)
- Fanfani, Amintore, 1934, *Cattolicesimo E Protestantismo Nella Formazione Storica del Capitalismo*, Milano: Vita e Pensiero. (= 1968, 佐々木専三郎訳 『カトリシズム・プロテスタンティズム・資本主義』 未来社.)
- 羽入辰郎, 2008, 『マックス・ヴェーバーの犯罪：『倫理』論文における資料操作の詐術と「知的誠実性」の崩壊』 ミネルヴァ書房.
- Jacob, Margaret and Matthew Kadane, 2003, “Missing. Now Found in the Eighteenth Century: Weber’s

Protestant Capitalist" *The American Historical Review*, 108: 20-49.

岸田紀, 1977, 『ジョン・ウェズリ研究』 ミネルヴァ書房.

越智武臣, 1966, 『近代英国の起源』 ミネルヴァ書房.

Robertson, H. M, 1933, *Aspects of the Rise of Economic Individualism: a Criticism of Max Weber and his School*, London: Cambridge University Press.

Samuelsson, Kurt, 1957, *Ekonomi och Religion, Stockholm: Kooperativa forfundets*. (= 1971, 田村光三ほか訳, 『経済と宗教 — ひとつのマックス・ウェーバー批判』 ミネルヴァ書房.)

Seaver, Paul, 1985, *Wallington's World: A Puritan Artisan in Seventeenth-century London*, California: Stanford University Press.

清水俊毅, 2013, 「ジョン・ウェスレーの経済神学 — その内的変遷と集成」『東京大学宗教学年報』, 31: 177-198.

椎名重明, 1996, 『プロテスタンティズムと資本主義 — ウェーバー・テーゼの宗教史的批判』 東京大学出版会.

世良晃志郎, 1973, 「理念型の理論構成と反証の問題」『社会科学の方法』 46: 1-6.

東方敬信, 2008, 「ジョン・ウェスレーの経済倫理への一考察」青山学院大学宗教センター『キリスト教と文化』 24: 33-49.

梅津順一, 1989, 『近代経済人の宗教的根源』 みすず書房.

———, 2010, 『ウェーバーとピューリタニズム 神と富の間』 新教出版社.

Weber, Max, 1920, *Die protestantische Ethik Und der Geist des Kapitalismus, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd. 1, SS. 17-206. (= 1989, 大塚久雄訳, 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 岩波書店.)

———, 1904, "Die, Objektivität "sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis" Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd. 19: 22-87. (= 1998, 富永祐治ほか訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』 岩波書店.)

Wesley, John, 1831, edited by Thomas Jackson, *The works of John Wesley, Vol. 14*, London: Wesleyan Methodist Book-Room. (= 1972, 野呂芳男訳, 『ジョン・ウェスレー著作集V 説教 下』 新教出版社.)

山本通, 2004a, 「M・ヴェーバーの「倫理」テーゼを修正する (上)」『商経論叢』 39 (4): 149-162.

———, 2004b, 「M・ヴェーバーの「倫理」テーゼを修正する (中)」『商経論叢』 40 (1): 19-34.

———, 2004c, 「M・ヴェーバーの「倫理」テーゼを修正する (下)」『商経論叢』 40 (2): 1-39.

———, 2017, 『禁欲と改善 — 近代資本主義形成の精神的支柱』 晃洋書房.